

高校生が先端技術体験

加藤組導入無人ショベルを遠隔操作

三次河川国道

デジタル技術を活用し
た「カッコよく、安全で、
スマートな土木」の魅力

を体験し、建設業に興味
を持つてもらおうと、三
次市三次町の馬洗川右岸
で施工中の「令和6年度
江の川上流十日市地区掘
削外工事」の現場で14日、
ICT建機の体験会が開
かれた。県立三次青陵高
校（同市大田幸町）の総
合学科・機械系列2年生
12人が参加し、土木の最
先端技術に触れた。

に日立建機製の遠隔操作
X200A-7（20tク
ラス）を購入し、今回の
会場となった現場に導
入。日立建機日本による
と、同機は全国でもまだ
数台しかなく、中国・四
国地方の工事現場での導
入は初となるもので、工
事現場の生産向上や安全
性確保はもとより、災害
時の「切り札」として普
及が期待されている。

今回、この無人ショベ
ルの操作体験を通じ、人
が立ち入れない危険な災
害現場でも、離れた場所
から安全・迅速に復旧作
業ができる「地元の守り
力。同社では、昨年8月
手」としての意義を伝え

建設業を将来の選択肢と
して考えてもらいたいと
体験会を企画した。

体験会では、はじめに
三次河川国道事務所吉田
戦。一人ひとり順番に加
藤組の担当者から指導を

してバケットで土砂をす
く、指定された位置に
旋回して排土する一連の
作業を体験した。

生徒からは「想像してい
たものとはまったく違
い、指定された位置に
旋回して排土する一連の
作業を体験した。」と感想
が聞かれた。

体験会を終え、三次河



無人ショベルの操作体験



参加者全員で記念撮影

工事を発注した中国地方整備局三次河川国道事務所が主催し、施工を担当する加藤組（三次市十日市東、加藤修司社長）が協力。同社では、昨年8月手としての意義を伝え

之所長がインフラDXについて、中国地方整備局の取り組みや「推進計画2025」のポイントなど映像を使って分かりやすく説明を行った。

このあと、生徒たちは河川敷に設置された無人ショベルの遠隔操作に挑戦。一人ひとり順番に加藤組の担当者から指導を

してバケットで土砂をすく、指定された位置に旋回して排土する一連の作業を体験した。

生徒からは「想像してい

たものとはまったく違

い、指定された位置に旋回して排土する一連の作業を体験した。」と感想が聞かれた。

体験会を終え、三次河川国道事務所の河村昭副所長は「素晴らしい土木技術を体験し、土木の魅力が伝わっていればうれしい。生徒たちは探求心を持ち続けながら、人手不足が深刻な建設業界を担う人材になつてほしい」と期待を寄せた。

工事の指揮をとる加藤組の花園亮二作業所長も

「今までデジタルの中でしか感じられなかつたことを肌で感じ、建設業界に興味を持つてもらえた

ら」と話した。